

## 思考を開き，生活世界を組み直すことと「伝統スポーツ」をすることの可能性：岩手県久慈市山形町における「平庭闘牛」の場合

小木曾，航平  
広島大学大学院人間社会科学研究科

田邊，元  
富山大学芸術文化学系

<https://hdl.handle.net/2324/7174385>

---

出版情報：Japan Journal of Physical Education, Health and Sport Sciences. 65, pp.831-848, 2020. 日本体育・スポーツ・健康学会

バージョン：

権利関係：© 2020 一般社団法人 日本体育学会



## 思考を開き、生活世界を組み直すことと「伝統スポーツ」を することの可能性：岩手県久慈市山形町における「平庭闘牛」の場合

小木曾 航平<sup>1)</sup> 田邊 元<sup>2)</sup>

KOGISO Kohei<sup>1</sup> and TANABE Gen<sup>2</sup>: Rearrangement of a local community through traditional sports: Focusing on “Hiraniwa bullfighting” in Iwate prefecture. *Japan J. Phys. Educ. Hlth. Sport Sci.*

**Abstract:** In Japan, traditional bullfighting has officially survived in 6 prefectures, including Niigata and Okinawa. Yamagata in Iwate prefecture is a typical town in a mountain area that faces depopulation, similar to other rural areas in Japan. Since the 1980s, the town has been holding an annual bullfighting event (“Hiraniwa bullfighting”) and it is now recognized as a significant regional cultural-economic resource. The present study attempted to analyze the characteristic of Hiraniwa bullfighting by examining its historical development process and the ways in which people in rural Japan can rethink and rearrange their lifestyle and social design by practicing a traditional sport.

Chapter 2 summarizes the relationship between Yamagata and cattle based on folk-historical materials and considers the socio-cultural context of the origin of Hiraniwa bullfighting. An analysis of the data clarifies the significance of cattle as an economically important resource in Yamagata. Some inhabitants of Yamagata have made their living by keeping cattle since the Edo period. Keeping cattle has enabled them to subsist in the severe natural environment of such a rural and mountainous location.

Chapter 3 details the development process of the Hiraniwa bullfight considering the interaction between Yamagata and other places where bullfighting is held. People in Yamagata have not only raised bulls but also bred them for bull owners in other areas. This is because they are also stock farmers who breed short-horn cattle (tankaku gyū) as well as being bull owners or sometimes bull motivators (seko). In Yamagata, being a stock farmer and a bull owner are inseparable. This social context makes Hiraniwa bullfighting different from other bullfighting cultures in Japan.

Chapter 4 describes the development of short-horn cattle breeding in Yamagata since the latter half of the 20th century, focusing on its relationship with the daichi wo mamoru kai, which is a kind of consumer organization for promotion of organic food. As short-horn beef has less fat than other Japanese wagyu brands, so that the daichi wo mamoru kai has preferred to buy a short-horn beef more than other brand beefs. The connection between Yamagata and the daichi wo mamoru kai has eventually brought not only economic prosperity but also symbolic value to the town through production of short-horn beef.

Thus it has been shown that Hiraniwa bullfighting is an important focus of cultural expression in Yamagata and also a process through which local people can rethink and rearrange their way of life.

**Key words :** actor network theory, cultural expression, sport culture complex, rural community

**キーワード :** アクターネットワーク理論, 文化表現, 文化複合, 農村地域社会

1) 広島大学大学院人間社会科学研究科  
〒739-8524 広島県東広島市鏡山 1-1-1

2) 富山大学芸術文化学系  
〒933-8588 富山県高岡市二上町 180 番地  
連絡先 小木曾航平

1. *Graduate School of Humanities and Social Sciences  
Hiroshima University  
1-1, Kagamiyama 1-chome, Higashi-Hiroshima, Hiroshima  
739-852*

2. *Faculty of Art and Design University of Toyama  
180 Futagami-machi, Takaoka, Toyama 933-8588  
Corresponding author kogisok@hiroshima-u.ac.jp*

## I はじめに

### 1. 研究目的

日本の闘牛の多くは伝統文化であると同時に、今なおそれを行う担い手たちの日常実践であり続けている。それらは伝統という理由だけで継承されてきた訳ではなく、担い手たちの暮らしを反映する多様な動機に意味づけられ、また、そこにおける工夫と葛藤を伴いながら続けられている。従って、その実践の歴史と現在の関係は動的であり、変容する社会の諸価値を内包しながら今日に至る。

本稿は、そのような日本の闘牛の中でも、岩手県久慈市山形町の平庭高原を舞台に行われている「平庭闘牛大会（以下「平庭闘牛」<sup>注1)</sup>と略す）」に焦点を絞り、その形成と展開について明らかにしたい。現在、日本では6県9市町村で定期的な闘牛大会が開催されており、平庭闘牛は「東北唯一の闘牛」とも称される。しかしながら、廃止や縮小を経験しながらも、20世紀を通じて闘牛大会が存続してきた他の地域に比べて、山形町で定期的な闘牛大会が開かれるようになったのはようやく1980年代に入ってからである。平庭闘牛の誕生は日本の闘牛史において比較的新しい出来事なのである。

日本の闘牛について数多くの研究を行ってきている石川菜央は、この平庭闘牛の誕生を闘牛関係者同士の「交流の全国化による変化の一つ」と分析し、闘牛ウシ<sup>注2)</sup>の供給源としての山形町の役割を指摘する(石川, 2009a)。この点は平庭闘牛の特徴を考える上で重要であり、以降の本論でより詳しく述べることになるだろう。他方、石川が別稿に述べる通り、近年、日本各地の闘牛組織が1998年から始まった「全国闘牛サミット」を介して、地域を越えたネットワークを形成し始めている(石川, 2009b)。このような全国的な闘牛ネットワークの拡散と増殖を視野に収めながら平庭闘牛の在り様を明らかにしていく必要もあるだろう。

冒頭に述べた通り、日本の闘牛は単に伝統とい

う理由で、また、古くからの娯楽ということだけで行われてきた訳ではなく、それに関わる人々の日常実践として現に今も行われており、これを対象として様々な社会的事実を考察することが可能である。実際、上述の石川も「牛縁(うしえん)」という言葉を用いて、闘牛が社会的つながりを生成・維持する機能について多く論じている(石川, 2004, 2005, 2008)。また、災害と闘牛の関係を扱った植木今日子の研究は、そこで描かれた民族誌的情報そのものによって、闘牛の日常実践としての重要性を示唆している(植田, 2016)。植田は、2004年に起きた新潟県中越地震からの復興に対峙する旧山古志村の人々にとって、「牛の角突き(闘牛)」を再開することが普段の日常を取り戻すことと不可分の関係であることを指摘する(植田, 2016, p.157)。そして、同じく中越地震の被災地であった新潟県小千谷市における「牛の角突き」については菅豊が丹念な民族誌的記述を行っている(菅, 2013)。以上の通り、日本の闘牛研究には豊かな蓄積があり、上に挙げた研究のみならずノンフィクション作品なども含めれば実に多くのモノグラフが書き記されてきた。

### 2. 本研究の視点

では、本研究が平庭闘牛に焦点を当てる意義はどこにあるだろうか。先行研究の多くは闘牛の娯楽としての側面と社会(地域)を維持させる側面に注目し、両者の関係について議論を深めてきたといえる。しかし、そうした先行研究が明示的には語ってこなかった側面として、本稿は闘牛の実践がそれを担う人々の思考を開き、自らの生きて立つ生活世界を組み直していく過程に注目したい。言い換えれば、闘牛に関わる主体たちが闘牛によって何を思考し、また、学習し、それを通じて自己の生活世界を不断に再構築しているのかという側面に力点を置いて、検討してみたいと考えている。まずはこのようなアプローチを試みる上で文化人類学の動物研究ないしスポーツ研究が参照に値するだろう。

文化人類学には人と人以外の動物との関係について多くの研究蓄積がある。その内の1つの代表

的な議論は人間が動物を介して自己が住む世界を表象し、認識していることを明らかにしてきた<sup>注3)</sup>。C. ギアーツによる闘鶏の研究は、そうした動物の人類学とスポーツの人類学が手を結んで書かれた優れたモノグラフであろう（ギアーツ、1987）。ギアーツは「闘鶏はバリの経験をバリ風を読みこんだものであり、彼ら自身による彼ら自身の物語である」と述べ、バリ人自身よりもバリ人であることをよく語るものとして闘鶏を分析した。バリ人が闘鶏によってしていることは、興奮や快楽を楽しむことや、賭けを伴うことによる金銭の授受といった表面的な事柄以上のことである。そこでは、より深い何かやりとりされている。それは例えば、地位や名誉に関わることであり、それらによって与えられる人生の意味のようなものである。だからこそ、ギアーツはバリ人にとっての闘鶏を「深い遊び（deep play）」と表現した。

なるほど、このような視点は日本の闘牛を分析する際にも確かに有効であるだろうし、すでに言及した多くの闘牛研究はこうしたアプローチから成されていると評することも可能である。闘牛をすることは闘牛をすること以上の何かやりとりしている。こうした視点は、グレゴリー・ベイトソンの「メタ・コミュニケーション」としての遊びという考えとも通じている（ベイトソン、1986）。闘鶏であれ、闘牛であれ、人間はそこで単に遊ぶこと以上の何か遊ぶことを通じてやりとりしているのである。

本研究はこうしたギアーツに代表されるような遊びやスポーツに対する象徴人類学的アプローチに一定の意義と魅力を認めながらも、別の視点とアプローチを模索する。本論に見る通り、平庭闘牛はその誕生の背景からして単に闘牛の全国ネットワーク化による帰結というだけでなく、日本の中山間地域を生きる人々の思考と工夫の延長に生まれたという側面がある。山形町の人々は牛と共に彼ら自身のより良い暮らしを構想し、実験し、成功させてきた。その過程において闘牛をすることもまた山形町の人々に彼ら自身の暮らしを反省し、作り直していくための視点を与え、問いかけ

てきたといえるだろう。

こうした視点に立てば、遊びやスポーツが娯楽（play to joy）や生活それ自体（play to live with）といった側面だけでなく、人間を思考に向かわせ（play to think）、自身の世界への認識を変容させるような行為としての側面を有するのではないかと考えさせられる。つまり、遊びやスポーツをすることには、遊びやスポーツと世界を見ることが混ざり合う地平があるということではないだろうか。少なくとも平庭闘牛はそれを行う人間の思考を開き、自らの生活世界を不断に組み直していくような作用をしてきたのではないだろうか。

ところで、本稿が扱う闘牛のような遊びをスポーツ人類学では「民族スポーツ」ないし「伝統スポーツ」という概念で対象化し、研究を行ってきた（寒川、1995）。これら伝統スポーツ研究の理論に採用されたのが「スポーツ文化複合」（寒川、2017）という概念ないし視点であり、今日までこれと異なる別の理論が活発に模索された痕跡はない<sup>注4)</sup>。

スポーツ文化複合理論に対する宣言文とみなせる小論において、寒川恒夫はスポーツ文化複合を次のように説明する。「スポーツ文化複合は、スポーツを種々の文化要素の相互依存的複合体ととらえる立場である。つまり、社会の中で実際に展開されるスポーツは、これを直接間接に支える諸文化要素の緊密に連係しあう体系として現出している、とみるのである」（寒川、1994、p.18）。こうしたアプローチに従い、研究者は諸文化要素を便宜的に精神文化、社会文化、技術文化のいずれかのカテゴリーに振り分け、調査・分析し、その上で、「諸文化要素間の全体的な関係の在り方」すなわち「自他を区別させる特徴」（寒川、1994、p.19）を引き出す。

スポーツを広い社会・文化的コンテクストにおいて捉えようとする、こうした見立ては確かに有効であり、スポーツ文化についての議論を相対化、複雑化してきただろう。しかしながら、本研究は上述のようなスポーツ文化複合論に潜む通文化的視点に注意を向ける。寒川に代表されるスポーツ文化複合論研究には、意識的か無意識的かに

よらず、スポーツに対する素朴実在論的前提が伺える。例えば、寒川は別の小論においてスポーツ文化複合論から導かれるスポーツ観を次のように述べる。「すなわち時代と社会を問わずスポーツは文化諸要素の複合体であるという“構造”を共有するが、しかし、構成諸要素の具体的内容と諸要素間の関係のあり様において違いをもつ…と。そこでスポーツ文化複合の概念は、第二に、平安時代の蹴鞠とカンボジア王の水の祭りのポートルースとスイス相撲のシュビンゲンとIOCが展開するオリンピックなどなど時空を越えたスポーツの文化比較を可能にするのである」(寒川, 2004, p.8)。

スポーツ人類学ないしスポーツ科学の前提に関わるとはいえ、筆者はここに各々の運動競技や遊びとそれ以外との結びつきは多様であり得るが、その結びつきを超えてそれぞれの運動競技や遊びはスポーツという1つの共通性を有している、という認識を見出す。対して、本研究は種々の運動競技や遊びを、共有される文化要素を持つスポーツという1つの大きな枠組みにおいて捉え、解釈する方法を採用しないでいく。その理由はこれまでスポーツとされてきた種々の運動競技を単に“運動すること”や“諸要素を結びつける行為の関係”としてみる視点を持ち、それについての研究者の解釈を通じて、どんな議論を作り出せるかを考えてみたいからである。事例に即して言い換えれば、山形町の人々が闘牛することを通じて、すでにある文化・社会的要素をいかに新たな方法で結びつけ、自らの生活を組み直すことを行ったのかを考えてみたいのである。

本稿はこうして従来のスポーツ文化複合論とは異なる仕方で闘牛に関与する諸主体の結びつきを捉え、その実験的で動態的な側面について記述することを重視したい。本稿が担い手らの“思考”とか生活世界の“組み直し”といった生成的側面に議論の重きを置くこと背景である。なお、このような研究方法は近年の人類学・社会学でますます活発化するアクター・ネットワーク理論(Actor Network Theory: ANT)に部分的に呼応している。ブリュノ・ラトゥールに代表される

ANTの議論においては、人間と非人間は対称的な資格を与えられており、それぞれがある現象を成立させるのに関連する重要な主体、すなわち「アクター」である(浜田, 2018, p.102-103; 久保, 2019, p.49-54; ラトゥール, 2019, p.134-137)。またアクターは同時にアクター同士を結びつけるネットワークと不可分である。そして、社会はそうした諸アクターを結びつける実践の連鎖のなかでしかとらえられない「ネットワーク状の構成体」であるとみなされる(山崎, 2019, p.39)。

しばしば近代スポーツが人間と非人間の協働を曖昧にし、人間の力の限界や挑戦として提示、評価、称賛され、そのことで“スポーツ=人間のもの”と理解される傾向がある一方、伝統スポーツはそれと比較すれば、人間と非人間がそれぞれの資格に置いて対称的に参与する実践であることはわかりやすい。本稿が扱う闘牛だけでなく、例えば、漕手となる人間以外に舟、精霊、仏教僧、河川、龍など、人間と非人間の別なく多様なアクターが結びついて行われる東アジア・東南アジアの競舟のように、伝統スポーツの連なりに気付くためには特にANTのような視点は有用であろう。

すでに本稿は、遊びやスポーツと世界を見ることが互いに混ざり合う地平があるのではないかと、ということ指摘した。その見通しを本稿の仮説としてさらに進めてみれば、スポーツや遊びは諸主体が織りなす「世界制作」(チン, 2019, p.26-40)の過程ないしその暫定的な表現であり、そのような轍としてまず記述してみせることが、スポーツに注意を払う人類学的営みであると考えられないだろうか。また、その記述を通じて、われわれ自身がそれぞれに生を営むことの過程において、スポーツないし遊びという技法が別の他者とのどんな関係を生み出し得るのかを検討することはできないだろうか。

したがって、本研究では上記に示してきたような研究の枠組みに基づき、平庭闘牛の担い手らの思考や生活世界の組み直しという側面に筆者自らが内在しつつ分析・検討し、その結果として、スポーツや遊びと呼ばれ得る実践が今日の地域社会にどのように作用しているのかについて考えてみ

たい。そして、それが現代の日本の地域社会の人々の暮らしに資する可能性について描き出してみたい。本論で見る通り、平庭闘牛は山形町の人々の多くの実験の賜物である。遊びやスポーツをすることは、もちろんその規模にもよるが、いつも具体的な手続きと共にある。そこに人々の協働は必ず現れる。平庭闘牛の形成と展開は山形町の人々が闘牛をすることを通じて、地域に何ができるかを思考し、学習し、実践していく過程としてみることができるとしている。本稿ではこのような平庭闘牛について議論することで今日における遊びやスポーツの可能性について何がしかの示唆を与えることも目指している。

以上の視点を踏まえつつ、次節では先行研究を検討しながら日本の闘牛文化における平庭闘牛の位置づけを整理し、本論で扱うべき論点を明らかにしておきたい。

### 3. 先行研究にみる日本の闘牛文化と平庭闘牛

日本の闘牛は江戸時代に農閑期の民衆娯楽として盛んに行われるようになったと言われる。その後、明治から大正にかけて闘牛は最盛期を迎えるが、戦後のGHQ体制の下、多くの闘牛大会がいったんは禁止の憂き目に遭う（石川，2009a, p.117）。それでも細々と続けられてきた各地の闘牛大会であったが、再び1970年代頃に農林業の機械化が進み、役牛を所有する必要性がなくなると、闘牛をわざわざ行う者も少なくなり、衰退を余儀なくされる。結果として現在は岩手県、新潟県、島根県、愛媛県、鹿児島県、沖縄県の6県9市町村のみが定期的な闘牛大会を開催するのみとなっている。

こうした歴史を持つ日本の闘牛に関する研究は主に民俗学的手法によってその習俗の詳細が、継承に関わる課題—人口減少、産業の衰退—なども踏まえつつ検討されてきた（石川，2008, 2009a；曾我，1991）。各地域における闘牛の継承ないしその存続の要因について石川は次のようにまとめる。観光に対応して組織間の関係が変化してきた南予地方（愛媛県）、文化財として伝統の保持に力を入れる隠岐・中越（島根県、新潟県）、

そして郷土に根付いた娯楽である徳之島・沖縄（鹿児島県、沖縄県）である。また、近年では各地を結ぶ闘牛ネットワークについての研究も行われるようになってきた（尾崎ほか，2007；石川，2009b）。加えて、災害と闘牛という観点から地域社会と闘牛の関係を検討する研究も見られる（植田，2016；藤野，2013；菅，2013）。

本稿が扱う平庭闘牛は日本の闘牛の中でも比較的若い文化として、各地の闘牛ネットワークの発展と軌を一にするように展開してきた。後に述べる通り、そのようなネットワークの中で平庭闘牛と山形町は闘牛の素牛を供給する役割を担っている。素牛供給地としての役割は特に中越地方との間で強く働いている。この点は平庭闘牛の重要な特徴の1つとみなして良いだろう。ところで、すでに農業用の役牛を飼育する必要がない日本社会において、未去勢の雄牛を所有する経済的意義は少ない<sup>注5)</sup>。徳之島の民謡が「ケンカ牛を飼っていて豆や米を食べさせては所帯がつぶれる」と歌うように、このことは闘牛の担い手たちもよく理解している（曾我，1991, p.3）。もちろん実力のある闘牛ウシが育てば、それを転売して利益を得ることも可能である。しかし、牛主として購入した子牛が闘牛ウシとして活躍するかどうかは育ててみないとわからない。このように明らかに不経済で、ある意味では余分な闘牛ウシを飼育し、他の地域へと供給する役割を与えられている平庭闘牛と山形町について理解することは、本稿の重要な論点である。他方、こうした独特の事情が平庭闘牛そのものを他とは異なる形式に規定しているとも考えられる。この点を理解する上でも次に闘牛のルールを概観しておこう。

例えば、「牛慰み」（徳之島）や「牛突き」（隠岐）など、各地で様々な呼称で呼ばれてきた日本の闘牛は、しかし、闘いの形式においては牛対牛という点で共通している。円形に作られた闘牛場で2頭の牛が角や額を使って力競べをするのが日本の闘牛であり、この形式はアジアにしばしば見られるものだ。牛の所有者である牛主とは別に、闘牛に向けて牛を世話したり、取組の際に鼓舞したり宥めたりする仕事を担うのが「勢子」と呼ばれる

者たちである。この勢子が闘牛を仕切るのはどこも共通だが、その技術は地域によって異なる。例えば、牛を声で鼓舞する方法はすべての地域で共通するが、その掛け言葉は様々である。また、闘牛場内で勝負を仕切る勢子の数にも違いがある。牛1頭に対して原則として勢子を1人のみ付けるのが隠岐、南予、徳之島、沖縄である。その中でも、隠岐だけは勢子の交代を認めていない。一方、新潟県は1頭に対して、複数の勢子が付くことを認めており、平庭闘牛もこちらの形式をとる。このような違いは勝負の決め方とも関連している。

南の方では勝負はどちらかの牛が相手から逃げるまで行われる。一方、北の方ではあくまで勝負は引き分けで終わらせ、勝敗をはっきりと決めない。そのため、途中で牛同士を引きはがさなければならない。時に1トンにも上る興奮した牛を引き離すのには数も必要である。「足取綱」などと呼ばれる綱を牛の足にかけて引く勢子、その間に牛の急所である鼻を捉える勢子、また角を抑える勢子などが各自の役目を果たすことになる。平庭闘牛は中越地方と関係が深いことから引き分けルールを採用している。但し、このルールは平庭闘牛にあっては素牛を守るという意味でも重要である。牛に戦意を失わせることなく、また、体そのものを傷つけることがなく、まずは子牛を闘牛ウシに育てることに重きを置くのが平庭闘牛であり、そのためにも引き分けルールは守られなくてはならない。

先ほどから強調する素牛供給地であることは、平庭闘牛の開催規模の面にも影響しているだろう。良い牛がいれば中越を中心とする他の地域へと売られていくため、山形町の闘牛ウシの頭数は他と比べて多くはない。闘牛大会の開催も年に4回、取組数も毎回10場所前後である。比較すれば中越地方では5—11月まで月に平均して4回開催される。また、徳之島などでは年に全島大会年3回6場所と各町内などで行われる小規模の大会を合わせれば20回以上になるとも言われる。中越や徳之島ほどではない宇和島地方でも1月、4月、5月、7月、8月、11月と年に6回行われており、闘牛大会の開催数は今のところ平庭闘牛が

一番少なくなっている(石川, 2004, p.962)

以上、見てきた通り、平庭闘牛は素牛供給地としての役割を他の地域からも認められながら、同時にそれに規定されながらも、小規模に行われ、他にない意義を与えられた闘牛であることが理解される。だが、なぜ、そもそも山形町が闘牛の素牛供給地となったのか、その最大の理由はこの地域で飼育されてきた「短角牛」という種類の牛の存在に他ならない。現在、闘牛では黒毛和牛とこの短角牛が主に活躍している。短角牛は忍耐強く、体格も大きく、闘牛に向いているとされてきた。このような評判は中越だけでなく、南の徳之島や沖縄で活躍する短角牛が出てきたことでいよいよ全国的評価となっていく。

この事を鑑みれば、平庭闘牛の始まりが闘牛ネットワークの全国化によっていることは確かだとして、さらにこの地の闘牛大会の形成過程と今日的意義を探究するならば、この短角牛と山形町との関係を明らかにする必要があるだろう。

以上、本章では研究の目的と先行研究の検討を通じて、本稿の対象である平庭闘牛を日本の闘牛文化の中に位置づけた。以降の本論では、上に指摘した(1)なぜ山形町は闘牛ウシの供給地となったのか、(2)山形町と短角牛の関係はどういうものなのかという主に2つの論点を踏まえて、第2章で山形町と牛の関係を主に伝承や史資料によって整理し、山形町で闘牛が行われるようになる歴史的分脈を検討する。第3章では、平庭闘牛の形成と展開を資料とフィールドワークに基づいて明らかにし、闘牛ウシの供給地であることの背景を探る。第4章においては山形町と短角牛の関係を明らかにしながら、平庭闘牛が山形町という地域で行われていることの意義を検討する。そして、結びにおいて山形町の人々が闘牛を介して、思考を開くこと、生活世界を組み直すことは、伝統スポーツを今日の地域社会で行うことの意義とどう関係しているのかについて現時点での筆者の見解を述べる。



図1 平庭闘牛大会の様子（筆者撮影，2017）

## II 岩手県久慈市山形町と牛の関係

2017年（平成29年）の6月11日，日曜日，午前11時．平庭闘牛大会つづじ場所では2才の若牛たちが初めて闘牛に挑む．闘牛場の熱気をよそに会場となる平庭高原スキー場にはまだ肌寒さが残っていた．ここは標高1059.8mの平庭岳の中腹に位置している．それでもなおこの日集まった約1000人の観客は目の前で繰り広げられる牛たちの闘いに興奮していた．千秋楽の取組は1トン級の横綱同士の力くらべとなった．全ての取組が終了したのは午後の1時を過ぎた頃であった．「北限の闘牛」（宇部，2016，p.1）といった言葉で伝えられるこの平庭闘牛は沖縄や徳之島といった南の闘牛に比べれば，これまであまり注目されてこなかった．加えて，国指定重要無形民俗文化財である新潟県中越地方の闘牛の陰に隠れて，その全体像が明らかにされることはなかったと言えるだろう．本章では，平庭闘牛が行われる山形町の歴史や環境について触れるとともに，この地域と牛の関わり合いについて文字資料から明らかにしていこう．

### 1. 岩手県久慈市山形町（旧山形村）の概要

現在の岩手県久慈市山形町は2006年（平成18年）のいわゆる「平成の大合併」で，旧山形村が久慈市と合併することで生まれた．町は岩手県北部，北上山系の北端に位置し，平地はわずか

で，総面積の実に86%が山林原野で占められる典型的な山村である．北は軽米町，洋野町，西は九戸村，葛巻町，南は岩泉町と接する．2015年の国勢調査によれば，山形町は人口2,524人（男1,226人，女1,299人），950世帯からなる（久慈市，2019）．大正期以降で，この町の過去最も人口が多かった時代は1950年代で，7,000人を超えていた．しかし，1965年頃から減少に転じ，合併前後には3,000人を下回るようになった．日本の中山間地域が抱える「人の空洞化」（小田切，2009，p.3）という課題を山形町も抱えている．

こうした山間過疎地の山形町で平庭闘牛はいかにして生まれたのだろうか．それはこの地域と牛の関係を遡って見ていくことではっきりとする．平庭闘牛が形成される土壌は土地の暮らしぶりの中に長らく息づいてきた人と牛の共生の結果である．以降では山形町が山形村であった時代に焦点を当て，その生活の特徴を明らかにしていこう<sup>注6）</sup>．

山形村という名は1889年の町村編成に基づくもので，それまでは小国村，霜畑村，川井村，荷軽部村，日野沢村，戸呂町村，繫村の7村に分かれていた．現在はこの7村に来内を加えた8つの村から構成されている<sup>注7）</sup>．山形村と牛との関係を知る上でまず次のようなことが言われていることを紹介しておく．

山形村の北三村（戸呂町・日野沢・荷軽部）は古来馬の飼育が盛んで，近世から明治期にかけて牛の飼育数をはるかに上回っている．反面，小国・霜畑・繫・川井は牛の飼育数の方が多いのは，牛飼育に合った自然地形と荷役の目的があったからで，これが他の集落との違いである（山形村誌編さん委員会編，2015，p.64）．

江戸時代の山形村は農業，特に畑作によって生計を立てていた．牛や馬を飼って農業に利用するとともに，それら牛馬の売買も行った．また，農間稼ぎに物資の駄送にあたり生活を維持してきたともいう（山形村誌編さん委員会編，2015，p.233）

18世紀頃には製鉄産業が振興され、鉄を運送する必要が出ると牛は塩の運搬と相まって需要が増えていったと考えられる（山形村誌編さん委員会編，2015，p.300）。

1879年（明治12年）の資料に基づけば、山形村の牛馬の数はおよそ次のようになる。7つの村の合計で牛は1,115頭、馬は683頭で、牛の数が馬よりも1.6倍多い。際立って多いのは、川井、霜畑、小国で優に2倍を超えていた。これらの村は特に山がちの地域にあり、馬よりは牛による輸送が適していたのだろうと考えられる（山形村誌編さん委員会編，2015，p.300）。

また、江戸時代の山形村の百姓は牛馬の所有者から「立馬」「立牛」と呼ばれる預かり牛馬を飼育していた。これは「預託制」と言われる。立馬や立牛は小作人から見れば、その牛馬を使役できるという利点もあったが、一方で、借金の返済ができない百姓が利息などと相殺する形で預託制の契約を結ぶことも多かったとされている。つまり預託しても結局はわずかの手数料しか手元には残らなかった。それでも小国村などでは副業として牛を荷物の運搬に利用したし、むしろそれを専業とするような人もいたと言われる。

1923年（大正12年）、山形村の牛は1,303頭、馬は624頭になる（山形村誌編さん委員会編，2015，p.377）。その後、1950年（昭和25年）までに牛の数は836頭まで落ち込んだが、1971（昭和46年）には、乳・肉牛合わせて1,668頭、1982（昭和57年）には2,707頭にまで増加した。この頃は、村政も牛を農家の基幹産業にすえて、一生懸命取り組んだという（山形村誌編さん委員会編，2015，p.406）。

このように山形村で牛は、少なくとも、江戸時代から農家の現金収入源として飼育されてきた。これらの牛は特に「南部牛」と呼ばれた。そして、その南部牛を荷の運搬に使役し、それを生業にしたのが「牛方」である。次にこの牛方と南部牛に関する伝承を概観し、鬪牛との関連を見ておこう。

## 2. 牛方と南部牛

滝沢馬琴の『南総里見八犬伝』（1814—42）が新潟県中越地方の鬪牛の由来を伝えていることはよく知られている。この中越地方では古くから「南部牛」を鬪牛ウシとして用いてきたとされる。江戸後期に八戸藩内で製鉄業が盛んになると、山形村を經由して関東や越後までそれら鉄が運ばれるようになった。牛方たちは鉄を運んだ帰りには牛自体も売り払って、身軽になって帰ってきたという。中越地方と南部牛はここでつながる。売り払われた南部牛は越後で役牛かつ鬪牛ウシとなり、その伝統を今日まで受け継いで「牛の角突きの習俗」を支えている。山形町の鬪牛史はだから鬪牛の素牛供給地として始まる、とも言えるのだ。そして後述する通り、その役割は現在まで続いている。

話を牛方と南部牛に戻そう。明治以前に南部牛といえば、旧南部藩において使役として飼われていた牛を指す。一方、この地方で産出される馬は「南部駒」と呼ばれた。山形村誌は次のように記す。「本来、馬の方が歩く速度は速いため、常に馬を使用できればよいのだが、それは平坦な場所こそ可能なこと。山形村のように険しく、急峻な山道が多い地理的条件にあっては、牛も運搬用に重宝されたのである。こうした牛馬による物の運搬は、『駄賃付け』という1つの運送業としても確立しており、山形村にも従事者が多かった」（山形村誌編さん委員会編，2009，p.66）。すでに述べたように、実際、この「駄賃付け」による現金収入は重要であった。江戸時代後期のある資料は牛方に米食が普及していたことを記録しているという（山形村誌編さん委員会編，2015，p.370）。どうやら一部の村人はこうした駄賃付けによって平均的暮らしぶり以上の生活を実現していた可能性がある。

牛は山形村があるような峻険な山岳地帯でも荷崩れさせずに登り下りをした（山形村誌編さん委員会編，2009，p.308）。南部牛は日本在来種の中でも比較的骨格が大きく、四肢も丈夫で、粗食にもよく耐えたと伝えられている（久慈市総合政策部，2016，p.2）。では、南部牛は何を運んだのか。



図2 現在も残る塩の道旧道入り口（筆者撮影，2019）

鉄である。そしてまた塩もたくさん運ばれた。江戸時代には、現在の久慈市沿岸部やその南に位置する九戸郡野田村辺りで多くの塩釜が作られ、製塩が行われていた。この塩を沿岸部から内陸部に運んだ「塩の道」がいくつも現存している。山形村の牛方は牛を追ってこのような塩の道を歩いたのである。「馬は引くもの、牛は追うもの」——牛方は牛の後方に付いて牛の速度に合わせて歩いたという（山形村誌編さん委員会編，2009，p.72）。

1905年（明治38年）に塩専売法が施行されるまで、山形村を通る塩の道は村人にとって山では手に入らない塩や海産物を得るために不可欠の手段であった。同時に牛方は外の文化を伝えてくれる世間師のような役割を持っていたのかも知れない。だが、昭和30年代頃を最後に生業としての牛方は姿を消したとされている。そうした中で、牛の役割はいよいよ使役から肉用・乳用牛へと傾斜していったのであろう。かつての南部牛は明治期以降の品種改良により、現在の短角牛に変わっていく。短角牛は、南部牛と呼ばれた在来種にショートホーン種を掛け合わせて生まれたとされている。1957年（昭和32年）、日本短角種登録協会が発足し、日本で4番目の和牛品種として「日本短角種」が誕生した。そして、この短角種こそが現在の山形町の産業を支えてもいるのだ。また、経済的な側面と同時に、人の往来を生む闘牛ウシとして、山形町を賑わせている。南部牛から短角牛へ、使役牛から肉牛へとその役割は変化しつつも、一貫して牛は山形町の暮らしの基層文化を形

成してきたと言えるだろう。今、そこに闘牛という新たな要素が根を張り始めている。では、その闘牛について伝承は何を語っているのだろうか。

### 3. 牛方と闘牛

闘牛について伝承は多くを語らない。しかし、牛方が闘牛のようなことを行っていた可能性は十分にある。牛方が追う牛の群れを「ハズナ」という。1つの群れは5—7頭で構成されていた。このハズナを率いるため、牛方はリーダーとなる「ワガサ」を決めておく必要があった。ワガサさえ決まっていれば、牛方はそのワガサを統率することのみに注意を払えばよかった。そして、このワガサを決める方法が闘牛であったと言われている<sup>注8)</sup>。山形村誌は闘牛の由緒として「久慈市白前の鳥屋文書」を引いて次のように記している。一部を抜粋しておこう。

（中略）牛方をして（一人七頭）監理せしめ、牛方は年々人々入るもの前年予約しあり、其の際牛方立ち合いの上、牛を闘はしむ、其の勝利牛を「ワガサ」を称し定むる事、之れは年々の行事になり、其「ワガサ」に因り以下之レニ服従円満に争へ等の事なきものなり（山形村誌編さん委員会編，2009，p.73）。

しかし、このような伝承以外に当時の牛方と闘牛の関連を示唆する言説は見当たらない。少ない手がかりから言えることは、山形村の人々は古くから牛と縁のある生業や生活を営んでいたこと、さらに、本章の最初に述べたように、牛方が広く県（藩）外にも出ていったことである。そうであれば、彼らが闘牛という民衆娯楽に全く無縁であったとは考えにくい。牛方の行き先の1つであった新潟県側の伝承は、南部の牛方が連れてきた牛を買って、それを闘牛にしたと伝える。現在、新潟県の闘牛ウシの8割近くは山形町で生まれた短角牛であるとも言われ、塩の道ならぬ「牛の道」を作る両者の関係は今に続いている。

このように牛方と南部牛の歩みが平庭闘牛に与えた影響は少なくないはずである。まとめておけ

ば、伝承から見えてくる山形町と牛の関係は、この地の暮らしにおける牛の高い重要性を伝えている。それは人々の生活を助ける経済資源であった。運搬という役割を担った牛はおそらくモノだけでなく、様々な情報や文化の往来も担っていたのであろう。だから、山形町にとって、牛は外の世界と繋がる手段でもあったのである。この牛によるネットワークは、今日の山形町と闘牛を考える上でも重要である。次章では、こうした歴史の上に、今日の平庭闘牛がいかに形成され、展開してきたかについてさらに検討してみたい。

### III 平庭闘牛の形成と展開

平庭闘牛は現在、わかば場所（5月）、つつじ場所（6月）、しらかば場所（8月）、もみじ場所（10月）と年間4回にわたり定期大会を開催している。来場者数は平均700—2,000人ほどである。入場料は前売り1,000円、当日1,200円、中学生以下が無料となっている。主催者は「いわて平庭高原闘牛会」で、全ての取組は平庭高原スキー場内に作られた専用の闘牛場で行われる。事務局は久慈市役所山形総合支所産業建設課が担当する。大会には平均して20—30頭の牛が参加し、10—15組程度の取組が行われる。地元の牛主が所有する闘牛ウシは約20頭で、その他県外の牛主所有が約15頭であるという。なお闘牛ウシも含め、この地域全体の畜産農家が飼育する牛は約200—250頭ほどである。この地で飼育されている短角

牛は従順で我慢強く、体格も良いため闘牛に向いているともいわれてきた。では、平庭闘牛はどのようにして始まったのだろうか。

#### 1. 形成期

記録に残る上では山形村で闘牛大会が大々的に行われたのは1960年（昭和35年）が最初である。現在も続く「平庭高原つつじまつり」の中で行われた（山形村誌編さん委員会編，2009，p.75）。しかし、大会が続いたのは1962年（昭和37年）までで、警察から安全上の問題を指摘され、つつじ祭りでの闘牛は姿を消してしまった（山形村誌編さん委員会編，2015，p.466）。戦後すぐの山形村における闘牛の実施状況について、これ以上の詳しい文献記録は管見の限り見つかっていない。当時、村を挙げて観光開発を進めていた平庭高原とそこで開かれる「つつじ祭り」の中で闘牛が行われていることから、この時期の山形村の闘牛は「観光闘牛」の要素が強かったと考えられる。どれほどの牛や勢子が参加し、どのようなルールで行われていたかはわからない。残された1枚の写真から判断すれば、牛はそれほど大きくなくまだ2歳前後の若牛に見える。また、現在の平庭闘牛では綱を牛につけたまま取組を行うが、写真にそのような綱をつけている様子はない。そして、専用の闘牛場ではなく、「自然の窪地」を利用して行われていたようだ（山形村誌編さん委員会編，2015，p.466）。

その後、定期的に開催されるようになるのは



図3 平庭高原スキー場にある闘牛場の全体  
（筆者撮影，2017）



図4 1960年（昭和35年）に行われた闘牛大会の様子  
（出典）山形村誌編さん委員会編，2009，p.75

1980年代に入ってからとなる。この時期は観光闘牛ではなく定期的な闘牛大会の開催を目指して、組織化を進めていく段階であり、今日の平庭闘牛に直接につながっていく形成期にあたるだろう。しかし、1970年代から1980年代にかけて、闘牛はむしろ山形村の隣の軽米町で盛んに行われていた（山形村ふるさと振興課，2006，p.1188）。そうした中、1978（昭和53年）、山形村の闘牛関係者は軽米町の関係者と共に「みちのく闘牛会」をつくる（山形村ふるさと振興課，2006，p.1188）。山形村と同じように短角牛を生産していた軽米町では、常設闘牛場も設けられ、1981年（昭和56年）5月の闘牛大会には実に2,000人超の観客が集まったと伝えられている（軽米町役場総務課，1990，p.164）。一方、みちのく闘牛大会と並行し、1983年（昭和58年）には山形町でも独自の闘牛大会を開く動きが始まった。この背景には、軽米町で次第に闘牛をやる人が少なくなってきたことが1つの要因としてあった（山形村ふるさと振興課，2006，p.1188）。そして、この年の5月18日、山形村農村青年クラブ会員と闘牛飼育者有志によって発足した「いわて平庭高原闘牛会」は村での定期闘牛大会開催に着手したのである。なお、第4章で詳しく取り上げるが、この年の夏に「大地を守る会」と山形村との最初の産地交流会が開かれている（山形村総務課編，1993，p.782）。平庭闘牛と山形町の短角牛、その両方にとって1983年は画期的な年だったといえるだろう。

では、山形村の農業青年会はなぜ闘牛会を発足させたのだろうか。当時の会則から、その背景を確認しておきたい。以下に事業内容を述べる会則第4条を引用する。

- (1) 闘牛大会の運営に必要な総合計画に関すること。
- (2) 会員相互の飼育する闘牛及び育成牛の斡旋。
- (3) 会員相互の連絡協調と親睦。
- (4) 日本短角種の振興と経営安定に寄与すること。

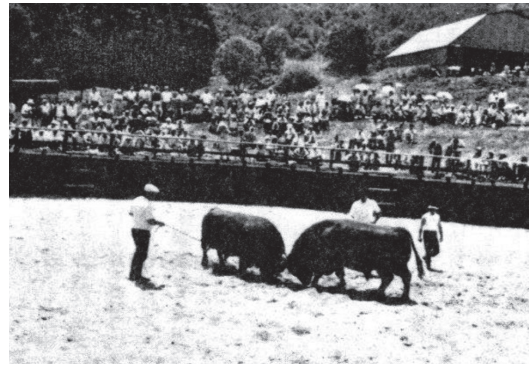


図5 1987年（昭和62年）の闘牛大会の様子  
（出典）山形村総務課編，1993，p.1003

- (5) 観光開発とその紹介宣伝に関すること。
- (6) その他、本会の事業達成に必要な事項。  
（山形村誌編さん委員会編，2015，p.468）

すぐに気づくのは平庭闘牛大会が短角牛の畜産振興と村の観光発展に寄与する事業として明確に企図されていることであろう。例えば、新潟や隠岐の闘牛組織が伝統の継承といった観点から闘牛組織＝闘牛保存会のような目的で組織されているのとは事情が異なる。これから闘牛大会を組織化しようとするのだから、それはむしろ当然のことかも知れない。しかし、ここに他の地域の伝統的な闘牛組織との差異を認めることができる。また、本稿が特に強調するのには、このいわて平庭高原闘牛会と畜産振興の関係であり、それこそが山形町に独自の闘牛実践をもたらす大きな要因になっているのではないかという点である。言い換えれば、平庭闘牛はその担い手の生業との相互関係を無視しては語り得ないということである。これについては第4章で再び取り上げたい。

話を闘牛大会の実施状況に戻そう。村の広報は、1987年（昭和62年）の闘牛大会の様子を次のように伝えている。

また、新築移転した闘牛場では、みちのく闘牛会の平庭場所が行われた。取組は全十四組。一ト前後の牛の熱戦に観光客も大喜びでした。新しい闘牛場はいままでのものより一回り大きくなり、近くには、前年完成したふれ

あい広場が駐車場として使用され、観客の受け入れも万全でした（山形村総務課編，1993，p.1003）。

上記のように、みちのく闘牛会との関係はしばらく続いていたようで、この翌年の大会についても次の通り報告されている。「祭りの初日に行われた『みちのく闘牛大会』（べごつき）は、軽米町と地元山形村から二十頭の牛（短角牛の雄）が出場し、約八百人の観客でにぎわいました」（山形村総務課編，1993，p.1053）。

一方、村は1986年（昭和61年）から始まった「リフレッシュふるさと推進モデル事業」で、「白樺」、「青空」、「牛方の里」といったキーワードに沿って、「高原の自然ときれいな空気そして村の歴史とかかわり合いの深い、牛と人間の結びつきをイメージ」した施設を平庭高原スキー場近辺に整備した。この時期、村でも自然景観とともに牛の存在が村の象徴として、あるいは資源として意識され始めていた。

1960年代の闘牛大会とこの時期の闘牛大会の様子を残された写真で比較すると、牛の体重も1トンとすでにかなり大きくなり、勢子たちも綱を牛の鼻に装着したまま取組に臨んでいる。また、新設された闘牛場は、闘牛場を観客席より低い位置に作り、柵も設置され、安全が確保されるようになっていく。関連施設の整備も進み、闘牛大会の定期的な開催がよいよ本格化してきたといえるだろう。

以上のように1960年代の試験的な観光闘牛を経て、いわて平庭高原闘牛会が発足した1980年代までに、現在の平庭闘牛の素地が形成されてきた。観光資源、つつじ祭り、短角牛の振興など、現在の平庭闘牛を特徴づける要素が出揃っている。こうした素地がこの後、平成時代の平庭闘牛の発展へとつながっていったといえるだろう。特に本研究が着目する点との関連でいえば、闘牛関係者の次のような言葉は重要である。「闘牛は今では下火だが、短角牛の経営が安定し、牛の全体頭数が増えれば自然に盛んになるのでは」（山形村総務課編，1993，p.1143）。平庭闘牛と短角牛の

振興は、当事者にとってやはり無視できない関連を持っているのである。そして、次節以降に見る通り、1990年代から2000年代にかけて闘牛や畜産業に関わる社会背景が変化する中で、こうした闘牛／短角牛振興という戦略は次第に山形村の中核を担うようになっていく。

## 2. 展開期

1990年、恒例となっていた「平庭高原つつじ祭り」での「つつじ場所」に加えて、平庭闘牛大会「盆場所」が初めて開催された（山形村総務課編，1993，p.1221）。その年の10月にはさらに「白樺場所」も開催され、平庭闘牛は年3回の定期闘牛大会を行うまでに発展した（山形村総務課編，1993，p.1235）。1992年の盆場所では初めて入場料1,000円が徴収された。他方、1993年にはいったん白樺場所が行われなくなるなど、この時期の闘牛大会の運営は継続的な事業可能性に向けて模索を続ける時期だったと考えられる。

こうした中、1998年の「つつじ場所」は初めて「全国大会」として開催され、沖縄、徳之島、新潟などから闘牛が参加した。また、この年の9月には初めて全国闘牛サミットが隠岐の島で開かれている。石川によれば、「闘牛を通じた全国的な交流が活発になったのは、交通手段や情報網の発達した1970年代ころから」であり、1990年代からは「携帯電話やインターネットの普及により、牛の売買や闘牛に関する情報交換などがさらに盛んになっている」という（石川，2009b，p.45）。

このような全国的な闘牛ネットワークの形成が平庭闘牛をも巻き込んでいるのは、もともとあった中越地方との関係が大きいのだろう。いくら交通手段や情報網が発達した1970年代であっても、徳之島や沖縄県から山形村や軽米町に闘牛ウシを探しに来るのは簡単ではない。しかし、すでに交流のあったとされる中越地方を經由して、短角牛の闘牛ウシとしての魅力は次第に南の地域にも知られるようになったと考えられる。前述の石川はそのきっかけとして、中越地方を經由して徳之島に売られた「新潟トガイ」という短角牛が、1980年に徳之島と沖縄でチャンピオンを破ったことに

言及している（石川，2009a，p.121）。

こうした中、2004年の「つつじ場所」とは別に行われた「全国闘牛サミット記念闘牛大会」はその後の平庭闘牛の発展をみれば、1983年に続く重要な画期といえる。この大会には全国から22頭の牛と様々な地域の勢子が参加し、会場にはおよそ2,000人の観客が駆けつけた（山形村ふるさと振興課，2006，p.1185）。当時の様子を伝える記事に目を通して気づくのは、平庭闘牛の担い手らが他地域の闘牛関係者との交流を通して、自身の行っている闘牛を冷静に分析していることである。

例えば、徳之島や沖縄の闘牛に顕著のように、日本の多くの牛主は趣味で闘牛を持ち、闘牛を行ってきた。他方、山形村では「牛の生産、飼育を行う畜産農家自体が闘牛に携わっている」（山形村ふるさと振興課，2006，p.1187）。畜産農家であると同時に牛主／勢子という場合には、時に採算の面から闘牛ウシの飼育を止めなくてはならないこともしばしばである（山形村ふるさと振興課，2006，p.1187）。そのような平庭闘牛関係者からみれば、趣味の闘牛に打ち込める他地域の牛主たちは羨ましくもあるのだろう。それでも、闘牛が好きな山形町の畜産農家たちはなんとかして闘牛を続けたいと考えている。他方、他の地域、とりわけ新潟県の闘牛関係者から山形村は闘牛ウシの産地として、つまりは素牛供給地として強く期待されている。山形町での牛の売買は、短角牛の市場価格に左右されるため、闘牛ウシとして売る方が損をする場合もある。そうした中で闘牛ウシの産地としてどこまで貢献するのか。平庭闘牛の関係者らは常にそうしたジレンマを抱えながら、闘牛に関わっているのである。

さて、その後、久慈市との合併を経て、2009年と2016年にも全国闘牛サミットが山形町で開催された。また、2016年には、平庭闘牛が久慈市無形民俗文化財に指定されている（久慈市総合政策部，2016）。それは、これまでの畜産振興や観光開発の資源としての闘牛という位置づけに対して、地域の文化資源としての役割をより明確に与えられたことを意味している。若い世代の勢子

を育てることや闘牛大会を通じてより多くの地域と交流を行うことがますます期待されているのである。昭和の形成期を経て、平成の展開期に至り、山形町の平庭闘牛の位置づけはいよいよ文化経済両面において高まりを見せていると言えるだろう。

以上、本章では平庭闘牛の形成と展開を資料とフィールドワークに基づき明らかにしてきた。山形町がその歴史とともに築いてきた牛との関係が少なからず平庭闘牛の特徴に影響している。それを端的に表しているのが、牛主／勢子のほとんどが畜産農家であり、自らが飼育する短角牛を闘牛ウシにしていることである。このことは、他地域の多くの牛主や勢子が職業を他に持ちながら、あくまで趣味として闘牛を行っている事と大きく異なる点である。平庭闘牛は当地の人々の生業と切り離すことができない。こうした背景のもと、生業、地域活性化、文化の継承といった村の社会的課題への対応とともに闘牛は形成され、展開してきた。その過程はそのままこの地の人々が自らの住まう地域での暮らしのあり方を模索し、思考する過程でもあっただろう。この地の闘牛はそのような意味で、闘牛が生業と娯楽の狭間で当事者らに何がしかの問いや意味を投げかける実践だったのである。次の章では、その平庭闘牛と生業の関連についてさらなる検討を行ってみたい。

#### IV 短角牛と山形町の象徴関係

本章では、山形町において短角牛の飼育がその基幹産業となり、ついに2007年（平成19年）には「山形村短角牛」としてブランド化され、その社会的評価を固めていく過程について、特に30年以上にわたって交流を続ける「大地を守る会」という消費者団体との関係に焦点を当てつつ、明らかにしていく。そして、そのようにして短角牛が経済的かつ文化的な資源になることと闘牛が行われることの関係について検討し、平庭闘牛の特徴をさらに描き出してみよう。

## 1. 短角牛の興り

「牛の飼育は、本村唯一の副業」——1938年（昭和13年）の村誌はそのように伝え、1918年（大正7年）に組織された山形村産牛改良組合による品種改良の末、ついにこの地に短角種が普及されるに至ったと記録する。現在伝えられているところでは、この短角種は山形村やその他の北上山系に在来した南部牛とアメリカから輸入されたショートホーン種を掛け合わせて生まれた品種である（山形村ふるさと振興課，2006，p.907）。明治期には他にも様々な外国種との品種改良が試みられていた。しかし、最終的にこの地方特有の厳しい自然条件と山間部での放牧に適応できたのが現在の短角牛であるといわれる（山形村ふるさと振興課，2006，p.907）。今日、短角牛は粗飼料の利用性が高いこと、病気に対する抵抗性が高いこと、山でも十分子牛を育てることができるとなどが評価されており、「夏山冬里方式」といわれる繁殖方法によって、飼育されている。夏は山に放牧し、冬は牛舎で育てるのがその方法である。

ところで肉牛としての短角牛の評価は近年高まりを見せている。その肉質は日本で主流の黒毛和牛とは異なり、サシ（脂肪）が少ない赤身肉であることが特徴である。しかし、日本の牛肉市場では黒毛和牛とその霜降肉が好まれており、市場価格は黒毛和牛の方が2倍ほど高く取引される（農畜産業振興機構，online）。

さて、1960年代に山形村はその生活基盤を大きく転換することになる。まず1964年に山形村農業基本計画が策定され、肉用牛の振興が謳われた。また同時期に山形村観光協会も設立されている。そうして1967年には肉用牛繁殖センターが落成する。この時期の山形村の変化について小松光一（1995）は「開田をすすめながら、木炭にかわる作目として、酪農生産、短角牛の子とり生産から肥育生産への転換、ビートなどの畑作目の模索が行われていった」と評する。他方、すでに述べたとおり、1970年代頃を境に人口は減少に転じる。村がその農業改革を進める一方、出稼ぎなどによって現金収入を得る人も増えていった。その後も、短角牛は生産者の減少だけでなく牛肉輸

入自由化や狂牛病問題などによって、市場価格が安定しないまま、不安定な状況が続いた。しかし、そうしたリスクの高い短角牛飼育を少なからず救っていたのが「大地を守る会」という消費者団体との関係であった。

## 2. “健康な牛” という評価

「大地を守る会」は、「農薬公害の完全追放と安全な農畜産物の安定供給」を求めて、1975年に設立された（藤田，2002，p.118）。この大地を守る会が設立された背景の1つに食への安心や環境への配慮に対して社会的な関心が高まり始めていたことが挙げられるだろう。わけても都市部の主婦層の健康な食品を求める声に後押しされていた面は少なくないという。設立当時、大地を守る会から野菜を購入する母親たちの中には食材が子供の健康に与える影響を真剣に苦慮する者たちがいたのだ（大地を守る会，online）。当時、まだ珍しい無農薬や無添加を謳う有機野菜の需要を支えたのはそうした家庭の食を預かる主婦たちの願いであった。

すでに述べた通り、この大地を守る会と山形町の関係が本格的に始まるのは1983年である。この年、大地を守る会の消費者会員が現地を訪れて生産者と交流する「山形村ツアー」が初めて実施され、観光闘牛も催された（大地を守る会，online）。生産者と消費者の相互関係を重視する大地を守る会の理念において「顔の見える関係」を築くことは重要であった。

1983年の最初の交流会には県内外から約450人が参加したとされており、会場となった平庭高原では短角牛の肉、田楽、高原牛乳の試食、試飲コーナーが設置され、その他にも民泊などが行われるなど、総じて「大好評」だったようである（山形村総務課編，1993，p.782）。同時期には村内で地元産の短角牛を用いた料理会なども始まっている。当時、村民自身が村の短角牛を食べる機会はほとんどなかった。しかし、大地を守る会との交流を通じて、少しずつだが村民たち自身が短角牛を自らの村の誇るべきものとして認識し始めていた。

以後、毎年夏には大地を守る会の消費者と山形村を結ぶ交流は続けられていった。交流会は基本的に2泊3日で行われ、歓迎会、参加者の農業体験、牧場見学、民泊などが主要なプログラムになっている。大地を守る会はこの交流会の試みを次のように評価する。

山形村との交流ツアーは、以後も毎年欠かさず実施されてきた。その積み重ねの中で、村民たちは“村にある当たり前のもの”—自然や食材など、つまり自分たちが育んできた“文化”への自信と誇りを深めていったように思う。ここで消費者のはたした役割は大きい（大地を守る会、online）。

一方、1983年に山形村の村長に就任した小笠原寛は大地を守る会との交流を次のように回想している。なお、小笠原自身、短角牛の生産者でもあった。

これまで、商品である日本短角牛については気を配ってきたが、肝心の自分たちの暮らしや自然環境に関しては、まったく無関心だったのだ。これではいけない。自分たちの足元をしっかりとしなければ、短角牛だって浮かばれない。そうした思いが強まり、健康な牛から、安全な食べ物、良好な環境、そしてそれを生み出すライフスタイルへと関心は広がっていったのだ（小笠原、1995、p.166）。

1980年代前後、設立間もない大地を守る会はまだ畜産との関わり方を模索している時であった。そうした中、短角牛は大地を守る会の理想に合致する肉牛としてその価値を認められる。先に述べた「夏山冬里方式」といった飼育方法、自然交配、霜降りが少ない赤身の特徴とすることなどが評価されたのである。そして、当時の岩手県畜産課長からの要望もあり、結果的に大地を守る会と山形村の提携関係は短角牛だけでなくその他の農産物も含めた包括的なものとなった。

提携後、順調に大地を守る会との取引頭数は伸

びていったが、1986年（昭和61年）をピークに飼育頭数は減少し始めた。生産者が高齢化していったことが原因の1つだ。加えて、1991年（平成3年）には牛肉の自由化もあった。また、2000年代にも狂牛病問題が起きた。つまり、大地を守る会との提携を経て、徐々に山形村の「短角牛」というブランド価値は上昇しつつあったが、全て順風満帆というわけではなかった。それでも、「山があって牛を持っていればなんとか食っていった」のは、大地を守る会が市場に左右されない一定の価格で取引を続けてきたからなのである（大地を守る会、online）。実際、筆者自身もこうした大地を守る会との関係があるから、まだ闘牛が続けられるといった発言を勢子から聞いたことがある。久慈市との合併以降も、山形町にとっての短角牛の意義は弱まっていない。すでに述べた通り、2007年には「山形村短角牛」としてそのブランドの確立にますます注力している。

以上のように、短角牛は時間をかけて、山形町の経済的かつ文化的資源へと生成されてきた。中山間地域という厳しい生活環境の中で模索した山形町らしい産業としての短角牛は、大地を守る会との出会いを経て、この町の生活の延長線上にある文化的シンボルへと意味づけされていった。その過程とは、山形村の人びとが短角牛という牛を通じて、自らの住む土地を学び直し、分析し、再構築していく過程であったといえるだろう。では、こうして生業として牛に関わることと闘牛はどんな関係を持ち得るのか。次の章ではこの問題について筆者なりの考えを述べてみたい。

### 3. 単なる肉牛以上の存在

現在ではもう行われてはいないが、かつては山形町でも「牛競り」が行われていた。競りの日はお祭りムードで、露店なども出ていた。「農家に金が入るのは、秋の仔牛と炭だけ」と言われるほど、秋の牛競りは一大イベントであった（山形村誌編さん委員会編、2009、p.67）。1983年（昭和58年）頃に山形村の小学生によって書かれた「牛」という作文には、競りの前には親子総出で牛の毛をけずり、前日には神様におみきを上げて、高く売れ

るようにと祈る，そのような家族の様子が描かれている。しかし，売った後にはさびしさが残ることもそこには書き記されている。

すでにこれまでに述べてきたことからわかる通り，山形町の人々は牛を介して生活を立てることや楽しむことを経験してきた。この地の生活のハレとケ，労働と遊び，その両方に牛の存在は深く関わっており，生きるなかでの機微や機知は牛と共に感じたり，覚えたりすることだったのである。だから，平庭闘牛の位置づけはこうした重層するコンテクストと共に成立していると考えなくてはならないだろう。

小田切は現代の日本の中山間地域に必要なのは「誇り」だという（小田切，2009）。なるほど，その誇りが何なのか，どのようにして生まれるのか，それは確かに難しい問いである。しかし，本稿はある意味において，山形町の誇りとは何かについても検討してきたといえる。今や，短角牛は山形町の「誇り」の1つになっている。それはこれまでに見てきた山形町の人々と牛との協働の歴史を考えれば，それほど的外れではないだろう。別の言い方をすれば，短角牛はすでに山形町の象徴になっているのだ。そうであるから，経済資源として安定的ではない商品ともとれる短角牛にこだわる。商品であるとか，肉牛であるとか，基幹産業であるとか以上の意味を山形町の人々は短角牛の中に見出している。この点に関連させて言えば，平庭闘牛はこの地域と牛の複雑で重層した関係性を他の地域の人々に伝える重要な機会になっているとも言えるだろう。その意味では，山形町の平庭闘牛は闘牛以上の何かである。

闘牛飼育は赤字前提の趣味というような考えは，おそらく多くの闘牛関係者に共有されているだろう。そうした中，平庭闘牛では闘牛をすることが畜産家／勢子の生業の舵取りとも直結する点で独特である。短角牛飼育を生業とする山形町の畜産家／勢子たちにとって，短角牛を肉牛として育てることも，闘牛として育てることも，そのどちらもが「やっぱり好きだから＝楽しみ」に支えられている。畜産家／勢子の一人はこう述べる。「こんなの（筆者注：闘牛ウシ）を置くのはバカ

なの。ただ，バカなりに一生懸命やりたい」（山形村ふるさと振興課，2006，p.1188）。安定した収入を目指せば，黒毛和牛を導入することも手だった。しかし，短角牛とそれを求める「大地を守る会」との関係が山形町という地域のアイデンティティにいつしかなっていた。そして今や短角牛は闘牛ウシとしても，他の地域から強く必要とされている。肉牛／闘牛ウシの飼育という生業の困難さの中にあっても，闘牛を続けていくことが畜産家／勢子のやりがいを創出していると考えられることもできる。そして，闘牛はそのような単なる牛以上の短角牛と生きることの文化的表現なのである。ある勢子は，「肉牛は死んで価値をもつ，闘牛は生きて価値をもつ」と語る。これを筆者なりに解釈すれば，山形町の畜産家／勢子にとって闘牛をすることは，彼らなりの動物倫理の実践と言えるかも知れない。

## V 結び

本稿は，日本の闘牛の中でも比較的新しく登場してきた平庭闘牛の特異性に着目し，その形成と展開の過程を歴史的に追いかけてながら，闘牛が行われる山形町の人、牛、自然環境の複雑な関係の一端について検討を行ってきた。平庭闘牛の特異性を描く上で本稿が焦点を絞ったのが，山形町が平庭闘牛の開催地というだけでなく闘牛の素牛供給地になっているという点である。

第2章では素牛供給地になることができた歴史的背景を主に史的資料を用いて明らかにするとともに，山形町の生活における経済的な牛の重要性を浮き彫りにした。山形町は山形村であった時代から，牛と共に生きてきたことが明らかになった。第3章では，そうした山形町において平庭闘牛が形成され，展開していく過程をその他の地域の闘牛との関わり合いの中で再構成した。ここでは，平庭闘牛が山形町の基幹産業である短角牛の振興と密接に関連しており，それは同時にこの地の闘牛を担う勢子が畜産家でもあり，闘牛をすることと肉牛を飼育することが不可分の関係にあることが指摘された。第4章では，20世紀後半以

降の山形町における短角牛飼育の発展について、大地を守る会という消費者団体との関係を中心に明らかにした。日本国内で主要な品種となっている黒毛和牛とは肉質の異なる短角牛が大地を守る会との取引を通じて肉牛としての価値を高め、やがては経済資源としてだけでなく地域の象徴にまでなっていることを指摘した。平庭闘牛もまた娯楽や観光という文脈の上でだけ成立しているわけではなく、山形町の人々自身が自らの住まう地域について思考し、その在り様を組み直す過程において、単なる闘牛以上の実践として行われてきたと理解すべきことが示唆された。

ところで、周縁にあるからこそ、日本社会や日本農業の潮流にただ従うのではなく、時流とは別を行くことを選んできた山形町のその位置どりは、そこに暮らす人々の思考実験の賜物であるだろう。そして、牛はそのような山形町の人々の思考の源泉であった。肉牛／闘牛ウシを育てることに対する内外からの期待と、それに対する担い手らの葛藤や苦悩——闘牛をするべきか否かというジレンマ。その思考の過程で、担い手らはこの町のあり方と対峙し、この土地を生きている。そのような人と土地と牛のつながりが闘牛という表現となって山形町という中山間地域の誇りを示している。闘牛を介した外の地域とのつながりは、楽しみや遊びを通じた縁という意味で、経済価値とは異なる価値を山形町の人々にもたらしている。そのような結びつきが山形町を外へと開いているのだ。このようなネットワークは合理的な組織網ではなく、より情緒的な連帯に基づいている。このことが持つ意味は、闘牛に興味を持つ者なら誰にでもこの山形町が開かれているということである。

このような山形町の平庭闘牛は、日本の地域社会で伝統スポーツが行われることの意義の一端を伝えてくれている。日本の地域社会で実践される伝統スポーツは、それがその地域の歴史や文化を織り込んで実践されているが故に、その地域を不断に組み直し、より良いものへと再構成していく際の思考の材料となる。そして、その思考はさらにまたその伝統スポーツをすることを通じて、実

験され、反省され、地域の協働的な営みとして前進的な運動を生み出していく。人間と非人間の対称性が見えにくい近代スポーツとは異なり、あえて伝統スポーツの実践に注意を向けることで学べるかもしれない。それは人間や非人間がスポーツをすることを通じて、別の関係性に向かう試行や失敗を共に経験していることであり、結果的にそれがそれぞれの主体なりの世界制作を推進していく力の一助と成り得ているかも知れないという事実を見出すことができる点にあるだろう。

### 謝辞

本研究における現地調査では、いわて平庭高原闘牛会や久慈市役所山形総合支所の関係者の皆様に多大なご協力を頂きました。ここに改めて感謝を申し上げます。ありがとうございました。また、本研究は JSPS 科研費 JP18K10833 及び 2017 年度笹川スポーツ研究助成の助成を受けたものです。

### 注

- 注1) 単に「平庭闘牛」と記すときは、大会のみではなくこの地の闘牛という意味で使用する。大会を特に意味する際には「平庭闘牛大会」を使用する。
- 注2) 本稿では闘牛を行う牛そのものについて言及する際にはこのようにカタカナ表記を用いて「闘牛ウシ」とする。また、繁殖牛や肥育牛として育成する前の子牛を「素牛（もとうし）」と呼ぶ習わしがあり、闘牛の場合についても闘牛ウシとして育成する前の牛を「素牛」と呼ぶ場合がある。この場合にはカタカナ表記はせず「素牛」と表記する。
- 注3) 動物を人間にとっての good to think か good to eat かという視点から捉える伝統的な議論がある。しかし、近年は good to live with の視点から、動物を人間にとっての経済資源や象徴資源としてみなすのではなく、共にこの世界に生きる主体としてその存在を議論する視点へとシフトしている。詳しくは White and Candea (2018)などを参照。
- 注4) このことは『よくわかるスポーツ人類学』（寒川編、2017）において、「スポーツ人類学の視点」としてこのスポーツ文化複合が紹介され続けていることから例証される。
- 注5) 去勢されていない雄牛は肉牛としての価値が低い。
- 注6) 以降、合併以前の歴史について触れる場合には「山形村」と表記し、合併後や現在の山形町について述べる場合には「山形町」と表記する。

注7) ただし、この辺りの地域に「山形」という呼称を使用する例は江戸時代からあった(山形村誌編さん委員会編, 2015, p.120).

注8) この他、放牧された牛の群れの中で行われる牝牛同士の角の突き合いを牛方たちが楽しんだことが始まりともいわれている。

## 文 献

- ペイトソン:佐伯泰樹ほか訳(1986) 精神の生態学(上). 思索社.
- 大地を守る会, <http://www.daichi-m.co.jp/history/980/> (参照日 2019年11月20日)
- 藤野功(2013) 災害復興における民族スポーツ—新潟県山古志・小千谷地区の牛の角突きに着目して—. 早稲田大学大学院スポーツ科学研究科修士論文.
- 藤田和芳(2002) 3—大地を守る会の運動. 榊渥俊子・松村和則編, 食・農・からだの社会学. 新曜社, pp.118-123.
- ギアーツ:吉田禎吾ほか訳(1987) 文化の解釈学II. 岩波書店.
- 浜田明範(2018) アクターネットワーク理論以降の人類学. 前川啓治ほか編, 21世紀の文化人類学. 新曜社, pp.99-132.
- 石川菜央(2004) 宇和島地方における闘牛の存続要因—伝統行事の担い手に注目して—. 地理学評論, 77(14): 957-976.
- 石川菜央(2005) 隠岐における闘牛の担い手と社会関係. 人文地理, 57(4): 374-395.
- 石川菜央(2008) 徳之島における闘牛の存続と意義. 地理学評論, 81(8): 638-659.
- 石川菜央(2009a) 日本の闘牛. 秋篠宮文仁・林良博編, 家畜の文化. 岩波書店, pp.117-128.
- 石川菜央(2009b) 全国闘牛サミットの開催地における意義—岩手県久慈市の「第12回全国闘牛サミット」を事例に—. 広島大学総合博物館研究報告, 1: 45-51.
- 軽米町役場総務課(1990) 町村合併35周年記念広報かるまい縮刷版. 岩手県九戸郡軽米町.
- 小松光一(1995) 山村に生きる人びとの暮らし. 小松光一・小笠原寛編, 農山漁村文化協会.
- 久保明教(2019) ブルーノ・ラトゥールの取説. 月曜社.
- 久慈市(2019) 久慈市統計書(H31.3), [https://www.city.kuji.iwate.jp/matizukurika/koho\\_g/statics\\_h3103.html](https://www.city.kuji.iwate.jp/matizukurika/koho_g/statics_h3103.html) (参照日 2019年11月20日)
- 久慈市総合政策部(2016) 広報くじ6月1日号. 久慈市.
- ラトゥール:伊藤嘉高訳(2019) 社会的なものを組み直す. 法政大学出版局.
- 農畜産業振興機構, <https://www.alic.go.jp/operation/livestock/calf-report.html>. (参照日 2019年11月20日)
- 小田切徳美(2009) 農山村再生「限界集落:問題を超えて. 岩波書店.
- 小笠原寛(1995) 村おこし\*七〇年代型から九〇年代型へ—若輩村長の取組み. 小松光一・小笠原寛編, 山間地農村の産直革命—山形村と大地を守る会との出会い—. 農山漁村文化協会.
- 尾崎孝宏・西村明・桑原季雄(2007) 「周辺=周辺ネットワーク」の形成と特質について—闘牛ネットワークの事例より—. 人文科学論集, 65: 25-48.
- 曾我亨(1991) 徳之島における闘牛の飼育と、その分類・名称・売買の分析—人々はいかに闘牛を楽しんでいるか—. 日本民俗学, 188: 1-48.
- 寒川恒夫(1994) スポーツ文化複合. 寒川恒夫編, スポーツ文化論. 杏林書院, pp.18-24.
- 寒川恒夫(1995) 発刊に際して. 寒川恒夫監, 21世紀の伝統スポーツ. 大修館書店, pp.i-v.
- 寒川恒夫(2004) スポーツ人類学のパススペクティブ. 寒川恒夫編, 教養としてのスポーツ人類学. 大修館書店, pp.2-13.
- 寒川恒夫(2017) スポーツ文化複合. 寒川恒夫編, よくわかるスポーツ人類学. ミネルヴァ書房, pp.8-9.
- 菅豊(2013) 「新しい野の学問」の時代へ—知識生産と社会実践をつなぐために—. 岩波書店.
- チン:赤嶺淳訳(2019) マツタケ. みすず書房.
- 宇部芳彦(2016) 独自の文化を地域おこしに:平庭闘牛物語. 地域おこしケーススタディ. 久慈市. [https://www.city.kuji.iwate.jp/matizukurika/tiiki\\_g/casestudy.html#tougyu](https://www.city.kuji.iwate.jp/matizukurika/tiiki_g/casestudy.html#tougyu) (参照日 2019年11月20日)
- 植田今日子(2016) 存在の岐路に立つむら—ダム・災害・限界集落の先に—. 昭和堂.
- White, T. and Candea, M. (2018) Animals. In: F. Stein. (eds) The Cambridge Encyclopedia of Anthropology. <http://doi.org/10.29164/18animals>. (accessed 2019-11-20)
- 山形村総務課編(1993) 広報やまがた縮刷版. 岩手県山形村.
- 山形村ふるさと振興課(2006) 広報やまがた縮刷版II. 岩手県山形村.
- 山形村誌編さん委員会編(2009) 山形村誌第一巻民俗編. 久慈市.
- 山形村誌編さん委員会編(2015) 山形村誌第三巻通史編. 久慈市.
- 山崎吾郎(2019) 技術と環境. 松村圭一郎ほか編, 人類学の思考法. 世界思想社.

(2020年2月5日受付)  
(2020年9月18日受理)